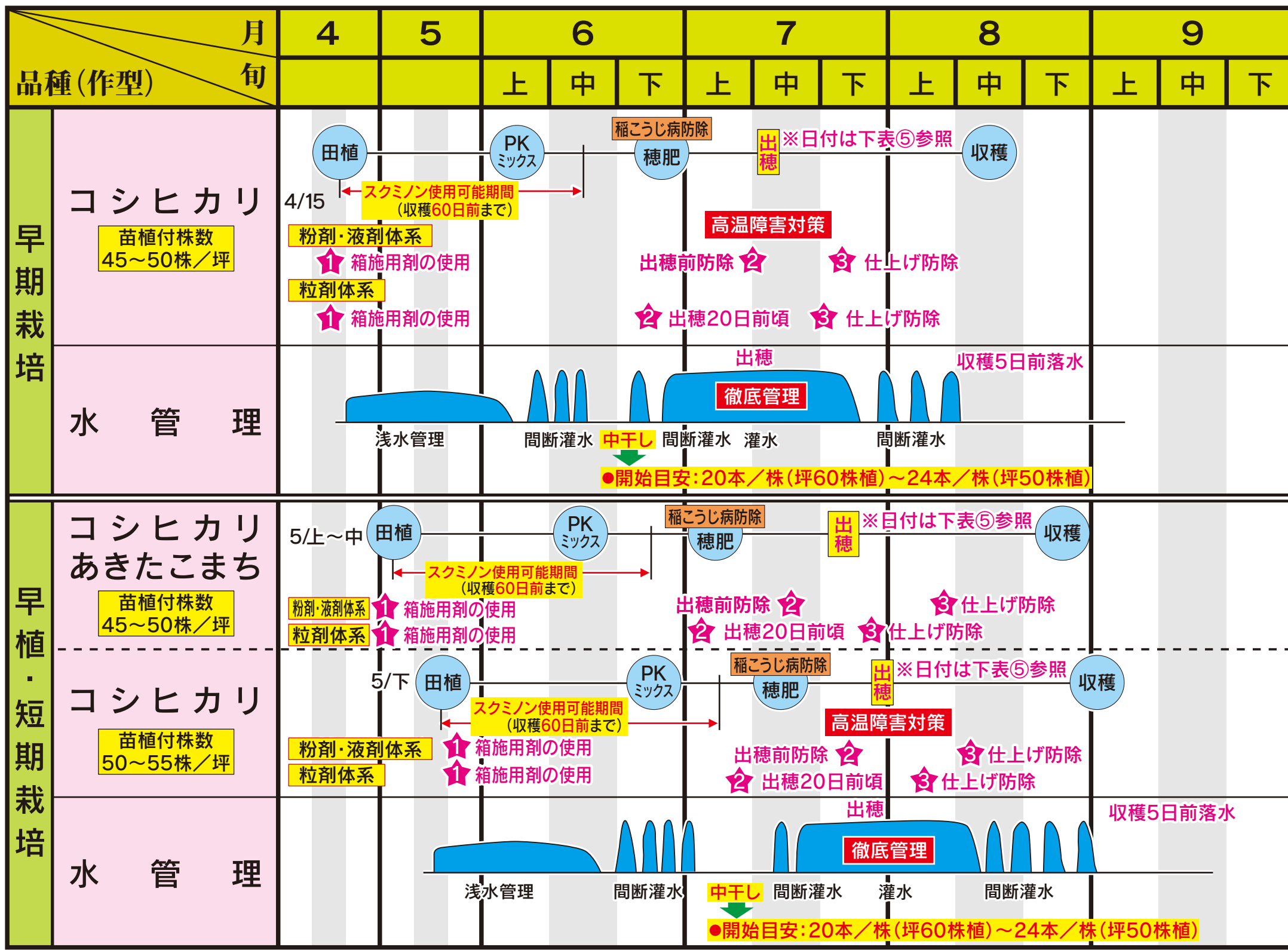


令和6年度 早期・早植・短期稲作ごよみ

周桑農業協同組合
周桑広域作物部会

米は全量農協へ!!
売れるうまい米づくりを
実践しよう!!

コスト低減と、品質の高位平準化を図ろう!!
カントリーエレベーターと育苗センターを有効利用して、



米品質向上対策

- 対策1 土づくりによる強い稲づくり**
●稲わらの腐熟促進・土壌改良促進のため、土壌改良剤の施用と併せて「秋耕こし」を実施しよう。
●土質が強いと根が上部に集中し、高温や異常気象に対応できない。
●今より3cm深い深耕。(堆肥や鉄強化美土の散布と併せて、ゆつくり深く耕す)
- 対策2 品種特性と地域に合わせた田植え時期の適正化で品質アップ**
●登熟期の高温を避けるため、早植・短期栽培は5月20日頃までに田植え。
●植付株数を少なくし、過剰分けつ抑制で適正な穂数を確保
●植付適正株数は坪当たり50株を基本とする。必要苗数16~18枚/10a (あきたこまちの短期栽培は、穂数を確保するため50~60株/坪とし、多めにつかむ)
●目標穂数が確保できれば中干しを開始する。強い中干しは根を切るため軽い地割れ程度で行い、灌水の再開は浅水で軽めから始める。
※但し、田植後45~50日経過すると幼穂形成期となるため、これ以降は水が最も必要な時期となる。よって田植後50日以降の中干しは品質の低下に繋がるため実施しない。
- 対策3 品種特性と地域に合わせた田植え時期の適正化で品質アップ**
●登熟期の高温を避けるため、早植・短期栽培は5月20日頃までに田植え。
●植付株数を少なくし、過剰分けつ抑制で適正な穂数を確保
●植付適正株数は坪当たり50株を基本とする。必要苗数16~18枚/10a (あきたこまちの短期栽培は、穂数を確保するため50~60株/坪とし、多めにつかむ)
●目標穂数が確保できれば中干しを開始する。強い中干しは根を切るため軽い地割れ程度で行い、灌水の再開は浅水で軽めから始める。
※但し、田植後45~50日経過すると幼穂形成期となるため、これ以降は水が最も必要な時期となる。よって田植後50日以降の中干しは品質の低下に繋がるため実施しない。
- 対策4 置き苗の早期除去**
●いもち病の発生源となるので、田植え後は速やかに除去する。
- 対策5 中間追肥施用による根張り・茎数確保と強い稲づくり**
●出穂40~30日前(田植後30日頃)に施用して、天候の変化や病害虫に強い稲づくりをつくる。良食味米生産に中間追肥施用の影響は大きく、欠かせない。
- 対策6 高温時や天候不順時の水管理を徹底して活力維持**
●登熟期の間断灌水や夜間水のかけ流しによる根の健全化に努める。
●入水は日中を過ぎてから開始し、夜間の水温を下げて、稲を休ませて活力を保つ。
●登熟期の土壌乾燥は品質を著しく低下させるため、**乾かさないうちに水を引く**。
●長い日数の深水状態や灌水は土壌を酸欠にするため、間断灌水を徹底し、一定時間は田面を出して土壌中に多量酸素が入るよう管理する。
●灌水の時期は刈り取り5日前とする。
- 対策7 病害虫の本田適期防除による健全栽培**
●出穂期防除は出穂前まで、穂期防除は10日後を目安に行い確実に防除する。
●カメムシ対策として、本田2回防除と併せて出穂15日前の周辺雑草の草刈を行う。



病害虫防除基準

① 粉剤体系

時期	対象病害虫	使用薬剤名	10a当たり使用量・倍率	使用時期・備考	応急防除(10a当たり使用量)
田植3日前~当日	いもち病 イネミズウムシ・ウンカ類・ツマグロヨコバイ・白葉枯病・もみ枯れ細菌病・イナゴ類	ビルダーリティア箱粒剤 ※JA育苗Cの苗を使用する場合は使用しない	一箱あたり50g	施用した後は軽く散水し、田植まで乾かさない。	○葉いもち:ダブルカット粉剤DL(4kg) ○紋枯病:バリダシン粉剤DL(4kg)
播種時	いもち病 イネミズウムシ・ウンカ類・ツマグロヨコバイ・白葉枯病・もみ枯れ細菌病・イナゴ類	ファーストオリゼリア箱粒剤 ※JA育苗Cの苗を使用する場合は使用しない	一箱あたり50g	播種同時でのみ利用可能。	○ツマグロヨコバイ・ウンカ類・食性害虫 :トレボン粉剤DL(4kg)
出穂20~10日前	稲こらじ病	Zボルドー粉剤DL	3~4kg	遅れると効果ない	○穂いもち:ブラシ粉剤DL(4kg)
出穂前防除	いもち病・紋枯病 ツマグロヨコバイ・ウンカ類 食性害虫・カメムシ類	ワイドナーエース粉剤DL	4kg	出穂前の夕方に株元にかかるように散布。 (★必ず出穂までに散布を完了)	○アブラムシ・イナゴ類:発生した場合は指導員に相談
穂期防除(選択)	カメムシ類 ツマグロヨコバイ・ウンカ類	スタークル粉剤DL	3kg	穂が傾いたころ、出穂後10~14日後(収穫7日前まで)	
	いもち病・カメムシ類 ツマグロヨコバイ・ウンカ類	ビームスタークル粉剤5DL	4kg		

② 液剤体系

時期	対象病害虫	使用薬剤名	10a当たり使用量・倍率	使用時期・備考	応急防除(10a当たり使用量)
田植3日前~当日	いもち病 イネミズウムシ・ウンカ類・ツマグロヨコバイ・白葉枯病・もみ枯れ細菌病・イナゴ類	ビルダーリティア箱粒剤 ※JA育苗Cの苗を使用する場合は使用しない	一箱あたり50g	施用した後は軽く散水し、田植まで乾かさない。	○葉いもち:ダブルカットフロアブル 1,000倍(100ℓ) ○紋枯病:バリダシン液剤5 1,000倍(100ℓ)
播種時	いもち病 イネミズウムシ・ウンカ類・ツマグロヨコバイ・白葉枯病・もみ枯れ細菌病・イナゴ類	ファーストオリゼリア箱粒剤 ※JA育苗Cの苗を使用する場合は使用しない	一箱あたり50g	播種同時でのみ利用可能。	○食性害虫:バダンSG水溶剤 1,500倍(100ℓ) ○ツマグロヨコバイ・ウンカ類:トレボン乳剤 1,000倍(100ℓ)
出穂20~10日前	稲こらじ病・黒穂病	ドイツボルドーA	2,000倍 100~150ℓ	遅れると効果ない	○穂いもち:ブラシフロアブル 1,000倍(100ℓ) ○アブラムシ・イナゴ類:発生した場合は指導員に相談
出穂前防除	ウンカ類・カメムシ類・ツマグロヨコバイ ツマグロヨコバイ・コメメイチュウ	トレボンスターフロアブル	1,000倍 + 100~150ℓ	出穂前の夕方に株元にかかるように散布。 (★必ず出穂までに散布を完了)	
	いもち病・紋枯病	ダブルカットバリダフロアブル	1,000倍		
穂期防除(選択)	カメムシ類 ツマグロヨコバイ・ウンカ類	スタークル液剤10	1,000倍 100~150ℓ	穂が傾いたころ、出穂後10~14日後(収穫7日前まで)	
	いもち病・カメムシ類 ツマグロヨコバイ・ウンカ類	ビームエイトスタークルソル	1,000倍 100~150ℓ		

③ 粒剤体系

時期	対象病害虫	使用薬剤名	10a当たり使用量・倍率	使用時期・備考	応急防除(10a当たり使用量)
田植3日前~当日	いもち病 イネミズウムシ・ウンカ類・ツマグロヨコバイ・白葉枯病・もみ枯れ細菌病・イナゴ類	ビルダーリティア箱粒剤 ※JA育苗Cの苗を使用する場合は使用しない	一箱あたり50g	施用した後は軽く散水し、田植まで乾かさない。	○いもち病:コラトップ粒剤5(4kg) コラトップジャンボP(500~650g)
播種時	いもち病 イネミズウムシ・ウンカ類・ツマグロヨコバイ・白葉枯病・もみ枯れ細菌病・イナゴ類	ファーストオリゼリア箱粒剤 ※JA育苗Cの苗を使用する場合は使用しない	一箱あたり50g	播種同時でのみ利用可能。	○その他の応急防除は、粉剤又は液剤で行う。
出穂3~2週間前	稲こらじ病・紋枯病・疑似紋枯病	モンガリット粒剤	3~4kg	遅れると効果ない	
出穂20日前頃	いもち病・紋枯病・稲こらじ病 粉粒細菌病・穂枯れ・ウンカ類 ツマグロヨコバイ・カメムシ類	ゴウケツモンスター粒剤	3kg	総合防除をする場合は出穂10~5日前頃に 灌水3~5cm状態で散布し、4~5日間は灌水を保つ。 稲こらじ病を防除する場合は出穂21~14日 前頃に散布する。(収穫45日前まで)	
	食性害虫	バダン粒剤4	4kg		
仕上げ防除	カメムシ類 ツマグロヨコバイ・ウンカ類	スタークル粒剤 スタークル豆つぶ	3kg 500g(カメムシだけの防除は250g)	出穂5~8日後に灌水3cmで散布し、 4~5日間は灌水を保つ。(収穫7日前まで)	

※上記①~③のいずれかの防除体系で実施する。 ※他作物と隣接している圃場は、粒剤体系が風等による飛散を少なくすることができます。

雑草防除基準

一回処理 ※雑草の多い水田や難防除雑草の発生する水田は、田植え直後に散布し中後期剤と中後期剤との体系処理を行う。

時期	使用時期	雑草名・他	使用薬剤名	流込み	10a当たり使用量・倍率	備考
田植同時~初中期	移植時~ノビエ3葉期 (田植同時散布機で使用する)	1年生雑草 多年生雑草	天空1キログラム		1kg	田植同時処理後は速やかに入水し、3~5cmの 湛水状態を保つ。 (7日間以内は落水やかけ流しはしない)
	移植時~ノビエ2.5葉期 (田植同時散布機で使用する)		ラオウ1キログラム	1kg		
	移植時~ノビエ2.5葉期 (田植同時散布機で使用する)		カチボシフロアブル	水口可	500ml	散布時は、3~5cmの湛水状態を保つ。 (7日間以内は落水やかけ流しはしない)
	移植直後~ノビエ3葉期		エンペラージャンボ		10バック(250g)	

○体系処理中後期剤 ※初期剤と初中期剤の体系処理で雑草を取りこぼした場合は中後期剤を処理する。

時期	雑草名	使用薬剤名	10a当たり使用量	使用時期(収穫前日数)	備考(使用の注意点)
中期	イネ科雑草 広葉雑草	クリンチャーバSM液剤	水70~100ℓに1,000mℓを溶かして散布	移植後15日~ノビエ5葉期 (収穫50日前)	散布時は必ず落水し、散布後4日間は入水しない。高温時の使用、重複散布は避け、夕方散布する。散布後降雨があっても落水しない(展着剤なし)。
		ハイカット1キログラム	1kg	移植後15日~ノビエ3.5葉期 (収穫60日前)	湛水して散布し、4日間は湛水を保つ(3~5cm)。 散布後7日間は落水、かけ流しはしない。
		レプラス1キログラム	1kg	移植後14日~ノビエ4葉期 (収穫60日前)	ホタルイが約20センチまで散布可能。 藻類他浮草が発生している圃場では、使用を避ける。(レプラスジャンボ)
		レプラスジャンボ	10バック(400g)		
後期	広葉雑草	バサグラン粒剤	3kg	移植後15日~55日 (収穫60日前)	落水してひたひた水で散布し、5日程度入水しない。 散布後7日間は落水、かけ流しはしない。散布後3日程度降雨不可。 ※コナキの多い場合は『グラスジンMナトリウム剤(液・粉)』を使用する。
		バサグラン液剤	500~700mℓ	移植後15日~55日 (収穫50日前)	

① 施肥設計基準(目標収量500kg)

品種	作型	10a当り				
		土改材 鉄強化 美土里	基肥 ことぶき化成 13-8-10 化成肥料444 14-14-14	中間追肥 PKミックス (土ミミ入) 0-10-10	流込み追肥 ソイヤ (水口流込み) 3-1-1	穂肥 ことぶき化成又は NK化成肥料1号 14-2-17
コシヒカリ	早期	60kg	20kg	20~40kg	6kg(1袋)	20kg
	早植・短期	60kg	20kg	20~40kg	※3日間灌水 し、減水する 場合は足し水	20kg
あきたこまち	早植・短期	60kg	30kg	20~40kg		25kg

② 全量基肥一発施肥(ワンタッチ肥料)の施肥基準

品種	作型	10a当り				
		鉄強化 美土里	ユーコートクイック	PK ミックス	ソイヤ (水口流込み)	備考
コシヒカリ	早期	60kg	25~30kg	20	6kg(1袋)	側条施肥の場合は基準 量から1割減とする。 その年の天候により、 肥効に差がある。
	早植・短期	60kg	20~30kg	40	※3日間灌水 し、減水する 場合は足し水	
あきたこまち	早植・短期	60kg	40~45kg			

※ワンタッチ肥料は比重が軽く、側条施肥田機使用の場合は、比重0.9以下で施肥量を調節する。
※一発肥料は、成分溶出後の酸が水に浮上することがあるため、圃場外に流出させないように留意してください。
(流水たかき、自然水、網の設置等)

③ 施肥注意事項

側条施肥の場合は、基肥を90%にする。

④ 倒伏軽減剤使用基準

薬剤名	10a当り 使用量	使用時期	備考	本剤の 使用回数
スマレット粒剤	2~3kg	出穂前7~20日	3~5cm湛水し、散布後3~4日 間は湛水状態を保つ。	1回
ピピフル粉剤DL	4kg	出穂前5~10日	重複、多量散布はしない。	1回
ピピフル フロアブル	水50~150ℓに 75~100mℓを 溶かして散布	出穂前10~2日	重複、多量散布はしない。	1回

ピピフル粉剤DL・フロアブルは走り穂が見えたら散布時期です。

⑤ 出穂期の目安(出穂期:全茎の40%~50%が出穂した日)

田植日	4/15	5/1	5/20	田植日	5/1	5/15	5/25
コシヒカリ 出穂期	7/13	7/19	7/29	あきたこまち 出穂期	7/13	7/22	7/28

※気温の変動によってズレる可能性があります。

⑥ 刈取適期基準

項目	早期栽培 コシヒカリ	早植・短期栽培 コシヒカリ・あきたこまち
出穂後日数(日)	33~38	33~38
最長稈黄変率(%)	75	85
積算温度(℃)	900~1,050	850~1,050

※最長稈黄変率は、収穫始めの基準で、1株中の親穂の着色を確認し、5株程度を平均して判断する。

⑦ 乾燥・調製の注意事項

- 調製・乾燥むらを防ぐため、急激な乾燥を避け、ゆつくり乾燥。
- 送風温度は、循環式で40℃以下。玄米水分14.5%を目標。
- ライスグレーダーは1.85ミリ以上の網目を使用する。
- 風袋含み出荷量は30.5kg。

スクミリンゴガイの防除ポイント

- ◆水路からの発生を防ぐため、雑草除去や泥上げを実施
- ◆田植前には、金網やネット等を張り、貝の侵入を防ぐ
- ◆田植後20日間の浅水管理で被害が軽減できる
- ◆卵塊・貝は見つけ次第、捕殺する
- ◆水稲収穫後(越冬期)の耕起を実施

薬剤防除

使用時期	薬剤名	10a当たり使用量 (使用回数)	備考
収穫後または田植前	石灰窒素	20~30kg	全ての対策の中で効果が一番 大きい。(使い方は下記参照)
移植後 (収穫60日前まで)	スクミリン	1~4kg (2回)	処理後、水を止めて(水深3~ 5cm)7日間保つ。

※スクミリンゴガイを確認後、直ちに散布。全面均一処理が基本だが、水口周辺や深水になる場所は所定の範囲内で多めに散布する。水田以外では絶対に使用しない。

石灰窒素の使い方

- ① 水路刈取後、又は、田植前に防除対象水田を3~4cm湛水し、3~4日放置する。(貝は、水温15℃以上で、活動する)
- ② その間、貝が水中で活動を始めたなら石灰窒素を20~30kg/10a散布し、トラクターで攪拌する。その後、3~4日放置して、殺貝する。

注意事項:田植前に石灰窒素で防除した場合は、基肥(窒素分)を減らす。

被害防止のため、地域、水系ごとの対策を行う!